



# 大建築の聖地

2013.03 / Vol.4



## 第4回 旧島根県立博物館(前編)

※1 田部長右衛門(1906-1979) 衆議院議員、島根県知事。山林大地主・田部家の23代当主。「後進県からの脱却」を掲げ島根県の発展に尽力した。県庁周辺整備の立役者。



※2 菊竹清訓「石橋美術館」(1956) ☆



※3 菊竹事務所の元副所長・遠藤勝勲氏へのヒアリング

※4 村野藤吾(1891-1984) 建築家。早稲田大学建築学科卒業後、渡部節建築事務所を経て独立。代表作に「宇部市渡部翁記念会館」、「世界平和記念聖堂」、「日生劇場」など。

### 田部長右衛門氏の悲願

旧島根県立博物館(現県庁第三分庁舎。以下、「博物館」と表記します。)は昭和33年に建設されました。設立運動の中心人物は後に島根県知事となる田部長右衛門氏(※1)です。政治家であり書家・陶芸家として芸術にも造詣の深かった田部氏にとって、県民文化の向上に寄与する県立博物館の設立は長年の悲願でした。

博物館建設が決定し設計者を探していた田部氏は、ブリジストン美術館の学芸員・岩佐新氏(島根県出身)のすすめで、ある新進気鋭の建築家が設計した石橋美術館(福岡県久留米市)を視察しました。

石橋美術館(※2)は自然採光・自然換気を生かして設計された建物でした。田部氏は、このように照明や空調に金のかからない建物なら、島根のような貧乏県でも維持していけるだろうと考え、この建築家に博物館の設計を依頼することを決心したそうです。(※3)

そしてこの若い建築家こそ、後に日本を代表する建築家となる菊竹清訓氏でした。

### 天才 菊竹清訓

菊竹清訓氏は昭和3年に福岡県久留米市に生まれ、早稲田大学建築学科を卒業後、村野藤吾氏(※4)の事務所等を経て、昭和28年に独立します。

大学3年の時、広島での平和記念聖堂設計コンペに応募し丹下健三氏ら錚々たる建築家に





交じって3位入賞するなど、学生時代からその才能に注目が集まっていました。

独立後の昭和35年には同世代の建築家の黒川紀章氏(※5)や建築評論家の川添登氏(※6)らとともに「メタボリズム」(生物学用語で「新陳代謝」の意)と呼ばれるグループを結成し、都市人口の増加や社会情勢の変化に応じて有機的に更新・成長することが可能な建築・都市計画を次々と発表(※7)し、世界的な注目を集めました。

菊竹事務所出身の建築家・伊東豊雄氏(※8)は、菊竹氏を「自分が初めて出会った天才」と評しています。

## 「くら」と「ざしき」

昭和32年5月、田部氏は菊竹事務所を訪れ、博物館建設の設計を正式に依頼しました。設計条件はもちろん「自然採光・自然換気の博物館」です。

このとき菊竹氏は弱冠28歳。まだ実績の少なかった若者の才能を見抜き、県の文化行政を象徴する博物館の設計を託した田部氏の度量の大きさには驚嘆に値するものがあります。



博物館の設計にあたり、筑後川の氾濫による水害をたびたび経験してきた久留米出身の菊竹氏は、同様に水害の多い松江で収蔵品を水害から守るため展示・収蔵スペースを上空高く持ち上げ、その下にホールや集会室を配した「高床式倉庫」のような建築を提案しました。

そしてこの建築のコンセプトを、日本人になじみの深い「くら」と「ざしき」という言葉で説明しました。「くら」とは収蔵品を保管・展示する守られた空間を、「ざしき」とは人が集まり交流するための開放的な空間をそれぞれ表しています。そして「くら」と「ざしき」を上下に組み合わせたものが島根県立博物館なのです。

## “静”と“動” 二つの顔

博物館の外観には、性格の違う2つの“顔”があります。

一つは県庁庭園側(北側)の“静の顔”です。この“顔”は松江城から県庁庭園へと連続する美しい景観を受け止め、そこに落ち着きとまとまりを与える「白い塀」のような役割を果たしています。



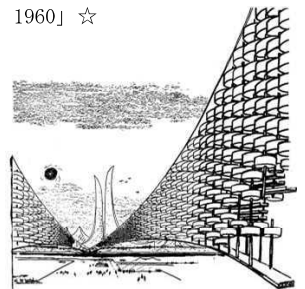
あくまで周囲の景観の引き立て役に徹しており、大胆な造形が目立つ初期の菊竹作品としては異例のものと言えるでしょう。

その静かな表情からは、松江城、安田臣設計の県庁舎、重森完途(※9)設計の県庁前庭に対する深い敬意が感じられます。

※5 黒川紀章(1937-2007) 建築家。東京大学大学院卒。在学中に自身の事務所を設立。代表作に「山形ハイドリームランド」、「中銀カプセルタワービル」、「国立新美術館」など

※6 川添登(1926-) 建築評論家。早稲田大学建築学科卒業後、雑誌『新建築』編集長を経て現在に至る。主な著書に『民と神の住まい 大いなる古代日本』、『建築の滅亡』、『生活学の提唱』など。

※7 菊竹清訓「海上都市1960」☆



※8 伊東豊雄(1941-) 建築家。東京大学建築学科卒業後、菊竹清訓建築設計事務所を経て独立。代表作に「シルバーハット」、「せんだいメディアテーク」など。2013年、建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞を受賞

※9 重森完途(1923-1992) 造園家。重森三玲氏の長男。早稲田大学文学部卒業後、重森三玲研究所を経て独立。代表作に「島根県庁庭園」のほか「ホテル穴道湖庭園」など



もう一つは、大手前通り側（東側）の“動の顔”です。建設中の高架道路を想わせるこちらの“顔”は、交通量の多い道路に面し、オフィスビルが立ち並ぶ都市的環境と対峙しています。展示室がたくましい柱によって上空高く持ち上げられ、その下のピロティは来館者で賑わいました。設計コンセプトの「くら(=展示・保管)」と「ざ

しき(=交流・集会)」の構成が外部へ最も明快に表されている部分であり、そのダイナミックな表情は菊竹作品の面目躍如と言うべきものです。

このように性格の異なる2つの表情が、1つの作品の中で分裂することなく共存し、それぞれの周辺環境と絶妙に呼応している様は「名建築」と呼ぶにふさわしいものです。

## 本当に“動く顔”ルーバーウォール

“動の顔”である大手前通り側の3階には、博物館最大のデザイン要素である「ルーバーウォール」と呼ばれる回転式建具が取り付けられています。(※10)

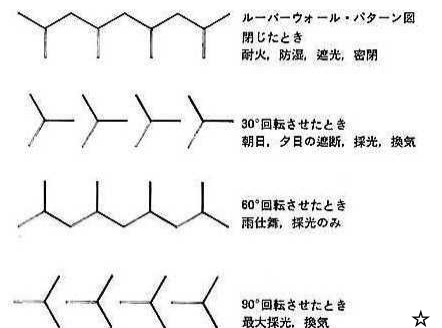
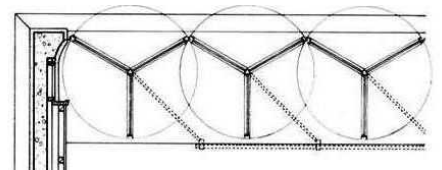
このルーバーウォールは、回転軸に3枚の羽根(うち1枚はガラスがはめられている)が取り付けられており、その回転角の調整によって展示室内の採光・通風量をコントロールする装置でした。(右図)

つまり、“動の顔”は、文字通り“動く顔”でもあったのです。

ルーバーウォールは「自然採光・自然換気の博物館」という設計条件に応えたものですが、ただ単に窓をあけるだけではなく、その条件を建物の最も重要なデザイン要素にまで昇華させたところに、菊竹氏の非凡な才能と、依頼主である田部氏への最大限の誠意を見て取ることができます。

この仕事の成功によって菊竹氏は田部氏と信頼関係を築き、その後「出雲大社庁の舎」や「県立図書館」などの設計を依頼されるきっかけにもなりました。

(次号に続きます。)



※10 ルーバーウォールは全22基(幅17.6m、高さ3.6m)をたった一つのハンドルで動かす構造であったため非常に重く、羽根を回転させるには二人掛かりの手間が必要でした。菊竹氏は将来的に電動化を考えていたようですが実現することはありませんでした。その後、収蔵品保護のため人工照明が主流になっていく中でルーバーウォールは閉め切りとなり、実際に動かされる機会はほとんどなかったようです。

◇ 写真・図版提供  
菊竹建築設計事務所 (☆印)

◇ 参考文献  
島根県『島根県庁周辺整備誌』(1972)  
菊竹清訓『菊竹清訓 作品と方法 1956-1970』美術出版社(1970)  
SD編集部『SD8010 特集一菊竹清訓』鹿島出版会(1980)